

日本記者クラブ会報

第343号
1998年
(平成10年)
9月10日発行

東京都千代田区幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100-0011
◎社団法人 日本記者クラブ
☎〇三三三〇三二二七二二(代)

和食レストランで新装お目見え 洋食はアラスカに会員席

お待たせしました。クラブレストランとアラスカの厨房を中心とする改装工事がやっと終わり、九月一日から新装オープンしました。二カ月間、本当にご迷惑をおかけしました。お詫びいたします。

どのように変わったのかは二、三頁をご覧いただくと、最も大きな変化はクラブレストランの厨房です。腐食・老朽化した給配水管を一新する一方、厨房を拡張して和食専用に再生しました。

和食専用にしたのは、会員に和食愛好者が多いというだけでなく、会合の食事で弁当の注文を受けながら、設備の不備で十分な対応ができず、みすみす外の仕出し

業者に頼ってきた経緯があるからです。これを、そっくりクラブレストランが担うことで事業収入の拡大を図ろう、という狙いです。

ラウンジは、ソファを一部だけ残してテーブル式にしました。ソファが大きすぎて「内緒話もできない」といった苦情が出ていました。これで、ブースが満席の時はテーブルで原稿書きも可能です。宴会場とクラブレストランが連結で使われた場合は、臨時のクラブレストランにもなります。

この模様替えて、テーブルは約四倍の七十席に増え、ソファは十五席となりました。国賓級ゲストに利用していた革張り製の背もた

れの大きな立派な椅子を、プレスセンターのご好意で借用できましたので、のんびりと身体を休めるのにも良いかと思えます。

「アラスカ」も化粧直しで再出発です。クラブレストランが和食専用になったため、「アラスカ」内に

会員専用エリアを設けました。これまでと同じく、会員用メニューで安くておいしい洋食が食べられます。接待用にはアラスカ一般メニューもあります。ご予約のうえ二割引でご利用ください。

ラウンジ入口に、その日の定食メニューを掲示しました。和食にするか洋食かを、選ぶのにも便利かと思えます。支障がない限り十階への専用階段も開けておきます。

さて、二カ月間の休みがありましたので、四月から実施した施設利用の変更を改めてご説明します。一つは、貸室料金の宴会割引です。一人当たりの飲食料金が三千

円以上の場合、各部屋とも一五%引きになります。土曜日は飲食を伴わなくても一五%引きです。

また月一金曜日は「アラスカ」内にある個室二室がクラブの小会議室並みの料金で利用できます。同じく夜に限り、安い会員料金で「アラスカ」の貸し切りもOK。これは、会員利用スペースの実質的な拡大です。同窓会やパーティーなど、特権を大いに活用ください。

七、八月号でご案内したクラブ活性化のための具体策もリニューアルと同時にスタートしました。

- ① 三十五歳未満会費制度の新設
- ② 賛助会員入会の促進
- ③ 発表の場としての機能促進
- ④ 取材証の使用条件の変更―の四項目です。④は若手の現役記者に親近感を持ってもらうための一つの策ですが、取材証を携行していればレストランやラウンジを自由に利用できるようになりました。ラウンジのテーブル席が増えていますので、現役記者の利用にも対応できる、と考えます。どうぞ温かいご理解をお願いいたします。

(専務理事 那部 吉正)



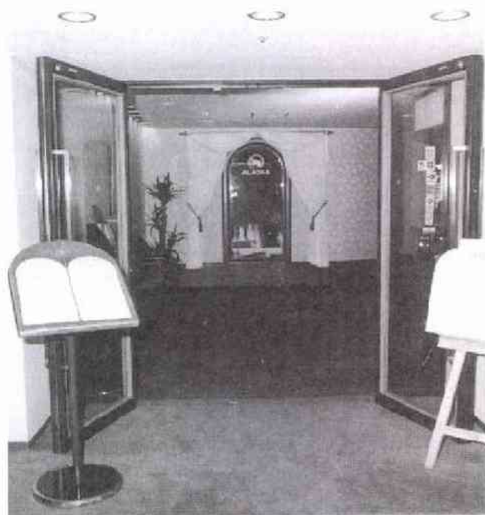
▲会見で使っていたVIP用の椅子を、プレスセンターから拝借して模様替えしたラウンジ



◀これまでの1.4倍、広さ64平方メートルに拡充した和食厨房。天ぷら専用器や完全自動炊飯器などの“新兵器”もそろいました。会議室での弁当やパーティーでの寿司もここでつくられます。薬科板長と3人の板さんが、会員の皆さんのため腕をふるいます。



▲和食専門となった9階のレストラン。昼は刺身、天ぷら定食のほか日替わりで肉料理や焼き魚、井ものを提供します。ピラフ、カレー、スパゲッティもOK。夜は懐石料理のほか、つまみセットの酒菜御膳や日替わり御膳、一品料理も用意。地酒も楽しめます。



リニューアル・オープン 洋食は10階 和食は9階で

12ページの「レストラン利用のご案内」もお読みください

◀ レストラン「アラスカ」のエントランス。洋食はこちらへ。係りの者が、会員用テーブルにご案内します。



▲ 「今日は、洋食と和食のどちらにしようかな？」——9階ラウンジの入り口にその日の和食、洋食のメニューを掲示します。



▲ 10階レストラン内の会員席 ゴージャスな雰囲気の中で、手ごろな価格の「会員用メニュー」が利用できます。接客をされる場合は、窓側の一般席へどうぞ。一般用メニューの料理が同伴客も含め2割引きで召しあがれます。



シルバールームは少し広め 12~25人の会合に▶

◀ 高い天井にしゃれたシャンデリアのゴールドルーム 利用人数は10~20人

ゴールドルーム シルバールーム (10階)

クラブの小会議室と同じ料金で使用できます。お申し込みはクラブのフロアマネジャーまで。



アセアン胎動

三十年前の若き指導者たち

山根卓二

さる六月十二日、産経新聞は日刊二万号を発行した。かつて在籍したものとして、ご同慶にたえない。

ところで、同紙が一万号を発行したのは二十八年前の昭和四十五年六月一日で、この時は記念企画としてアジア諸国を対象に大型連載を実施した（同年九月末から「日本の道・アジアの道」というタイトルのもと、四部構成で翌年にかけて連載）。

当時政治部デスクだった私も、この取材に動員され、第一陣のキヤップとして、インドネシア、シンガポール、マレーシア、フィリピンの四方国の現状をルポし、日

本の経済援助の実態を探ってみようということになった。

取材チームには私のほか論説委員（経済担当）、社会部、写真部から一人ずつ、それにフジテレビ、ニッポン放送、さらにアジア経済研究所の専門家も加わる大部隊。

折から木村武雄氏（故人・元建設相）を団長に一年生議員を中心にした議員団が東南アジア視察に出かけると聞き、私はチームより一足早く六月初旬、議員団に同行しジャカルタに向かった。若き日の羽田元首相や松永前蔵相らが一緒だった。議員団に便乗できたおかげで、現地ではスハルト大統領

はじめ主要閣僚との会談に同席でき、取材は順調にすべり出した。

スハルト大統領はジャワ人特有の仏像のような温顔に終始微笑をたたえ、国造りへの抱負を語っていた。

だが政情は不安定で、まさか、この後三十年近くも政権が続くとは想像もできなかった。

数日後、取材チーム本隊が到着した。当時ジャカルタは極端なホテル不足。苦心してやっと予約したホテルの部屋の確認を済ませ空港に迎えに行った。チーム一行と同じ到着機から振袖姿の日本女性が登場してくる。きけば翌日からジャカルタで開かれるアジア映画祭に招かれた女優たちだという。

全員、くだんのホテルについて、チェックインをしようとする、フロントの係が「部屋はふさがっている」と言う。

「なぜだ。さっき確認したばかりじゃないか」

「市長から急に命令がきて、映画祭の客を入れることになった」

それから押し問答を繰り返したがラチがあかない。一時は野宿かと覚悟を決めたが、日本商社のお世話で寮などに分散、一夜を明かすことになった。憤まんやるかたない私にアジ研のU氏がしたり顔で言ったものである。

「これが、インドネシアだ」

四週間ほどの取材を終え、次の取材地・シンガポールに向かう時、空港で私だけが、出国に待たされた。一行より先にインドネシアに入った日数だけビザの滞在期限をオーバーしていたのだった。完全に私のミスである。といって、ここで取材チームと離れるわけにはいかない。離陸の時間は刻々と迫る。

万事休した私はポケットから十ドル紙幣を取り出し、裸のまま係員に突き出した。すると「OK」と手を振ってくれる。いまにも外



マラカニアン宮殿でマルコス大統領（右）と握手する筆者（1970年）

されそうなタラップを駆け上り、機内にすべり込んだ。座席につき安全ベルトを締めながら、今度は私がつぶやく番だった。

「これが、インドネシアだ」

あとから十ドル程度の「袖の下」で勘弁してもらえたのは奇跡に近く、ビザの期限切れは普通二〜三日の拘留——と聞いて冷や汗がで

た。

その後シンガポールやマレーシアで、書かなかった話というより書くに書けないような経験も味わい、七月、フィリピンに入った。

この国で印象に残ったのは二人の政治家——アキノ上院議員とマルコス大統領——である。

アキノ議員とはマニラ湾近くの

私邸にうかがい、食事をご馳走になりながら話を聞いた。親日家で、痛烈なマルコス批判をしながら「日本は、やり方はともかくフィリピンを植民地から解放してくれたが、現在の経済協力は一握りの大財閥の私腹を肥やすのに役立つ」と言った言葉が忘れられない。

その時かたわらにいて、ニコニコしながら話をきいていたのがコラソン夫人で、十五年

ほど後に、ご主人はマニラ空港で悲惨な最期を遂げ、奥さんは大統領になろうとは——夢にも思わなかった。

マルコス大統領とはマラカニアン宮殿の大統領執務室で会った。部屋の前のソファに座って待っていると、ドアが開けっ放しになっていると、執務室の中が丸見えである。同行の通訳氏によると、ミンダナオ島の回教徒が役人に殴られたか、けられたかしたことで大統領に抗議をしているとのこと。

見ていると大統領が立ち上がり「見せる」というジェスチャー。すると男はなんと後ろ向きにズボンをずり下げ、大統領の面前に尻を突き出した。大統領は、その尻をピチャピチャたたきながら「分かった。たいした傷じゃない」というような素振り。

私は、日本の首相官邸の総理大臣室の光景と比べながら、何と気さくで親しみやすい指導者だろうか、と感心した。会談の席でも大統領は、高まる

学生たちの反政府運動に対して「破壊を目的とするものは別にして、穏健な改革には耳を傾ける」と語っていた。

そのころ、スハルト大統領は一選目。マルコス大統領は二選目。私の印象の中に二人とも独裁者の影はない。それが十五年、二十年……のあと、ともに腐敗にまみれ、国民の指弾をあびて、政権の座から引きずり降ろされてしまった。権力という「魔性」に魅せられると、人は破滅するまで離れられなくなってしまうのだろうか。



やまね たくし会員 一九二八年生まれ
五三年産経新聞入社 政治部長 編集局長
次長 取締役正論担当 常務取締役編集局長
局長 (株)西友顧問などを経て 現在
テレビ埼玉代表取締役社長

書いた話 書かなかった話

和歌山市郊外の小さな街の夏祭り
で起きた「食中毒」が、時間の経過
とともにその姿を変えていく。当初
の「青酸検出」、後日明らかになった
「ヒ素検出」。四人の犠牲者に六十三
人の通院者。地元のみならず、社会
に与えた大きな不安感。和歌山の毒
入りカレー事件は、紛れもない「凶
悪な犯罪」である。

すでに伝え尽くされた感もある
が、現場を振り返る。

事件の舞台となった祭りを主催し
た自治会は、六十世帯余りから構成
される小さなコミュニティ。初め
て現場を歩いた記者の多くが「実際、
街を歩いてみると、(テレビの)画面
の印象より小さいですね」と語る、
そんな閑静な住宅地である。

現場となった広場につながる道
は、車がやつとすれ違うほどの幅。
袋小路になっており、交通量は少な
い。住宅の同じ並びに、評判の「お
好み焼き」店がいくつかある。客の
出入りは多く、一部で伝えられた「駐
車をめぐるトラブル」は、ある意味
で、自然に起こった問題と思われる。
印象としては「ごく普通の街」。そ
の街の内側で、一体どんなあつれき

——和歌山毒カレー事件——

犯罪に怒りを 取材には「心」を

▶ 山本一宗
(読売テレビ放送)

や問題があったのだろうか。

当初、私たちが取材を進めても「不
審者」の情報が出ない。捜査本部の
発表も同じだ。祭りの参加者は顔見
知りがほとんどで、地区内部の犯行
かという推測が走り、住民の間にも
目に見えて不安感とストレスが増し
ていく。

「いまはちょっと手が放せないの
で」「何度同じことを聞くの」「いつ
までおるの、あんたら」

全住戸に張り出された報道自粛お

願いの紙。住民の心中は察してあま
りある。が、少しでも真実に近づく
のが取材である以上、こちらの「心」
を分かってもらううほかはない。

暑い夏空の下の取材で、日に日に
肌の色を濃くしていく若手記者。取
材がスムーズに運ばないストレスも
あり、疲れも大きいはずだが、ある
日明るい表情で「やつと○○さんが
話をしてくれました」とうれしそう
な顔で戻ってきた。こちらの心が届
き、「マスコミ」相手というより「一
人の人間」として認め、話してくれ
たときの喜び。連日激務を指示する
側からすれば、救われる思いである。

そんな中、改めて衝撃を与えたの
が「ヒ素検出」の知らせだった。ヒ
素中毒の症例は少なく、人体への影
響が懸念されるといふ。しかも発表
は事件から八日後。この時間の経過
が、被害者の不安を増大させていた。
捜査方針も急展開をみせたが、それ
よりも私たちの心に響いたのは、被
害者の生の声だった。

「先生(医者)もこれからどうなる
か、よく分からんというし」「治療費
が二十万をこえてなあ」

ようやく口を開いてくれた住民の

言葉が重かった。楽しみにしていた
祭りに参加し、カレーを食べただけ
なのに、突然、平和な日常はどこか
へいってしまい、体の変調におびえ
る毎日。何の罪もない人々の声に、
怒りがまたわいてくる。

現場にいると、ともしれば事柄だ
けに目を奪われ、取材対象者の気持
ちや視聴者の知りたいことを見失い
がちになってしまうことがある。犯
行の真実に迫ることはもちろん大切
だ。が、住民、被害者の声に直接触
れて、それをタイムリーに伝え、問
題提起していくことも、同じくらい
大切なのだ。ふと、自問し確認する。
いま、何を伝えなければならぬの
か、もっと大事なことはないのか、
と。

事件に怒りを、取材には心を、そ
して執念を。「今日も目立つのは報道
陣の姿だけで、現場はひっそりとし
ています」。このコメントに自戒の意
味も込め、意欲を燃やす毎日が続く。
八月二十八日現在、事件は解決を
みていない。

やまもと・かずむね 一九八八年入社 現
在 報道局報道情報センターで警察担当

毎年九月十九日には、松山市内で「糸瓜忌」が営まれる。今年には、近代俳句を聞いた子規の九十七回目の法要。そして二〇〇一年は百周年。子規は松山市出身。子規さん顕彰の盛り上がりとともに俳句熱も高まるうとしている。

愛媛新聞社は九月を「俳句の月」と提唱している。俳句文芸の普及と発展を目指して、九六年の本紙創刊百二十周年を機に創設した。子規にちなんだ「愛媛発十七文字のメッセージ」だ。

愛媛には中世から近世にかけ連綿と続く俳諧の歴史がある。子規、碧梧桐、虚子、東洋城、草田男、波郷、赤黄男、不器男と豊かな「俳句山脈」をはぐくんできた。こうした近代俳句の大きな流れの中に「俳句の月」も位置づけることができる。

月間中、多彩な事業・企画を打ち出し、それとタイアップした紙面の展開を通じて、広く県民にアピールしている。一昨年からはこれまでに、復本一郎神奈川大教授や作家村上護氏、坪内稔典京都教育大教授、地元俳人らによる俳句文

芸講座▽「吟行・俳人紀行」シリーズ（不器男、山頭火、漱石、芭蕉ゆかりの地を訪ねて）▽記念講演会▽「写真と五七五のツーショット」作品募集▽来春開通予定の本四架橋（今治―尾道）記念の「しまなみ海道俳句大会」▽「子規を考える一日」児童生徒作文紹介▽

列島報告

— 愛 媛 —

**17文字の
メッセージ**

深 井 博

(愛媛新聞社社長
文化部副部長)

高校生による「俳句甲子園まつやま大会」の開催で、地元青年会議所が主催。本来「座」に集う人々の共同の文芸だった俳句にふさわしく、高校生が俳句を楽しみ交流しようという初企画だった。若者らしい軽やかな句に活発なイベントを交えて展開された。参加は

か。現代を生きる人々は十七文字に何を託すのか。「自然を見つめ、人の心を結び、自己を革新する、それが俳句であろう。…科学技術や物質文明に偏った社会構造を変えていく手段として、扉を開く可能性があるのでないか」(愛媛新聞社発行「五七五の地球儀」結びより)

県内の九高校にとどまらず、今後、全国版に発展するが注目。愛媛にとって俳句は「県民の文芸」といってよい。愛媛新聞の俳句コーナーには毎日投句のハガキが多数届く。愛媛俳壇は虚子が選者を務めたこともあり、歴史は古い。現在は毎週、七人の選者による各俳壇を掲載している。

俳句ブームが抱える光と影、新しい俳句の展開も探る必要があるだろう。俳句王国といわれる愛媛でも、比較的年輩者がその中心を占めている。「俳句の月」の展開が、若い世代への一層の広がり、「第二、第三の子規」輩出につながっていくれば何よりである。

ブレ・イベント「路面電車で巡る五七五」——などなど。三年目の今年は新たにフォーラム「俳句と時代」、シンポジウム「再発見・河東碧梧桐」などを予定している。

今年、「俳句の日」(八・一九)に松山で新しい「芽」が生まれた。



宇和島市内の松根東洋城の句碑を巡る俳句愛好家たち (8,19)

(ふかい・ひろし)

会報アンケートの結果

(実施：1998年7月 総回答数：300)
回答率：10.3%

常設欄の閲読	よく読む (%)	時々読む (%)	ほとんど 読まない (%)	無回答 (%)
フロントページ	63.5	29.1	5.4	2.0
クラブゲスト	57.5	35.5	5.7	1.3
書いた話 書かなかった話	64.5	26.4	7.4	1.7
ワーキングプレス	38.9	39.6	15.4	6.0
列島報告	25.8	46.2	24.1	4.0
写真回廊	34.8	41.8	20.1	3.4
プロフィール	40.5	36.8	18.5	4.3
試写会	26.8	44.9	23.5	4.7
平均	44.0	37.6	15.0	3.4

8割以上が
「よく読む」
「時々読む」

七月号で実施した「会報アンケート」の総回答者数は三〇〇人で、回答率は一〇・三％（調査時点での会員数二、九一人）。残念ながら、過去三回を大幅に下回りました（八二年十一月二二・八％、八六年一月一七・一％、九〇年十二月二四・二％）。常設欄の閲読率は別表の

通りです。「よく読む」と答えた方が最も多かったのは、OB会員に現役時代の取材上の思い出を随想風にまとめていただいている『書いた話』書かなかった話』で、六四・五％の会員がよく読んでいました。

会員執筆の「クラブゲスト」好評

「よく読む」「時々読む」を合計した閲読率では、記者会見・研究会などのゲストを紹介する『クラブゲスト』が九三％と高い数字を示しています（前回八七％）。ことし一月号から司会の企画委員を中心に会員が執筆するようになったことが閲読率アップにつながったようです。

以下「フロントページ」九二・六％、「書いた話 書かなかった話」九〇・九％、一線記者の取材雑観リポート『ワーキングプレス』七八・五％、新入会の個人D・賛助会員を紹介する『プロフィール』七七・三％でした。また、写真記者の作品とエッセイでつくる『写真回廊』七六・六％、地方紙・地方局に連載やキャンペーンを報告していただいている『列島報告』七二％、クラブ試写会『映画評』は七一・七％でした。

全体の平均値は「よく読む」四四％、「時々読む」三七・六％で合計八一・六％。前三回のこの数字は八二年七七・五％、八六年七七・九％、九〇年七七・九％だったので、初めて八割を超えました。

なお「ほとんど読まない」「無回答」合計は一八・四％でした（八二年二四・五％、八六年二〇・九％、九〇年二〇・四％）。

△編集全般▽△新企画▽△臨時増刊「記録版」▽についての意見もうかがいましたが、ほとんどの方からコメントをいただきました。主だったものを紹介すると――。

△編集全般について▽

「現状のままでもいい」「コンパクトにまとまっている」「硬いが会報としては適当」「毎号楽しみ」「最近柔らかくなり良くなった」という意見が多数でしたが、「ややマンネリの感あり」「思い切って編集方針を白紙に戻し新しくしては」「全体に硬く読みやすいといえない。ひと工夫を」という指摘もありました。

「クラブゲスト」は「会員が書くようになり良くなった」「ページ数を増

やしもつと詳しい記載を」という意見が多数ある一方、「執筆陣が偏っている。より多くの会員の登場を」「各々のゲストの初めに会見のポイントをとまとめてほしい」「ゲストによって分量に長短を」という声も。

体裁についてはカラー化を望む声が多数あり、特に『写真回廊』はカラー化を考えるべきではないかという意見が多くありました。さらに、「A4判に」「活字を大きく」「横組みにしては」という意見もありました。またレイアウトについては「地味すぎる」「写真、カットを多く」という指摘がありました。

『書いた話 書かなかった話』は八一年十一月号(当初は『とつておきの話』としてスタート)から続く長期連載ですが、「マスコミ史を読む思いで参考になる」「先輩の話に啓発される。時には本数を増やして特集を」との意見がある一方で、「過去の話はほどほどに。もつと若手記者にホットなテーマで」「自慢話ではなく、ユーモアのある話を」「魅力に乏しい。流れの速い今の時代の感性に合わず」との意見もありました。この他いくつかの意見を紹介する

と▽若手記者の悩み、声をもつと前面にでる企画なり編集を▽「地方の時代」といわれるわりには地方のことを知らないの、『列島報告』の継続と充実を▽大したページ数ではないので希望者にはFAXまたはインターネットで▽新聞記事に比べやや情緒的。温かいのほうがいいが客観的に▽いい原稿に「専務理事賞」を▽毎号、岡田サッカー監督、清水スビードスケート選手の会見録のようなものを▽地方会員にクラブの活動を詳しく伝えて▽新設の『マイBOO K・マイPR』が大変いい▽『ワーキングプレス』『列島報告』にも執筆者の顔写真を▽各紙にない視点がほしい。『試写会』の拡充を▽目次がほしい。

△記録版について▽
記者会見や研究会を収録する臨時増刊号を年六回発行していますが、「参考資料として貴重」「出席できない地方会員にとっては大変ありがたい」「毎号保存している」「年六回と限定せず、収録対象を増やし、できる限り発行してほしい」「会場で配布された資料やデータもあわせて掲載を」と、より一層の充実を望む声が

多数ありました。一方で、「収録するものを厳選してほしい」「発行が遅い」「官報のようで読む気がしない」という声もありました。また、「手を入れず全容を収録するところに意味がある」との声がある半面、「やや長い」「全容より要約または重要ポイントを」「内容によって読むかどうかを判断したいのでエッセンスを冒頭に置く」「司会者が解説する欄をつける」などの指摘もありました。

△新企画について▽
次のようないろいろなアイデアが寄せられました。
▽世界各国のメディア事情▽世界のプレスクラブの紹介▽報道についての自己批判・反省的コーナー▽以前連載していた「ジャーナリストの作った言葉」の復活▽クラブの小史シリーズ▽老壮青のメンバーの座談会を開催し紙面で紹介▽特ダネをものにした最前線記者へのインタビュー▽技術革新めざましいメディアに

関する情報欄▽在日外国特派員の紹介▽会員の消息欄、近況報告▽各層の出先クラブめぐり▽会員の趣味、特技紹介▽会員からの意見を聞く投書欄▽私の主張」「声」欄▽内勤記者にスポットを当てて企画▽メディアが多様、多彩になっているので電子、電波部門の登場▽会見の通訳の苦心談、裏話▽大先輩物語(物語者も含め)▽OB会員に若手記者に残したい。思い出の記を募集▽我が社の特ダネ」▽クラブゲストのサイン欄▽外人記者会員が登場するページ(辛口メディア批評、日本の取材の裏話、母国のジャーナリズム事情、日本社会へのコメントなど)

「少々硬めの「クラブゲスト」、そんなことが」という『書いた話 書かなかった話』、座っていて分かる『列島報告』、ひねりのきいた『写真回廊』—毎号楽しみに読んでいます—
このようなコメントを寄せてくれた会員がいっぱいありました。
こうした声やここでご紹介できなかった貴重な意見も参考にして、一層充実した紙面をつくっていきたいと思います。ご協力ありがとうございました。
(長谷川)

◇個人D会員

プロファイル

八月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

「会報アンケート」記念品当選者

「会報アンケート」へのご協力ありがとうございました。結果と詳細は八、九ページに掲載しました。

記念品の当選者は抽選の結果、左記の十人の方々です。クラブのネクタイまたはハンカチセットをお送りしました。(敬称略・順不同)

- 飯野忠男(毎日新聞) 奈佐忠彦(東京新聞) 山根卓二(テレビ埼玉)
- 大石清夫(中部日本放送) 有馬真喜子(個人D) 石川正達(リ) 荻谷雄彦(リ) 西井武好(リ) 相川誠一(日本ABC協会) 緒方四十四郎(特賛)

▼カナダで二番目の全国紙誕生か?

七月に参院選後の政局の取材のため来日した、カナダの全国紙「グロープ・アンド・メール(以下G&M)」のマッケナ記者と、クラブラウンジで軽食をとった。

自分の取材の話もそっちのけで、来日直前にカナダのメディア王・コンラッド・ブラック氏が経済紙「フィナンシャル・ポスト」を傘下に加

会員の著書(ご惠贈いただきました)

定年族の時間割 大谷 健
(主婦の友社 一、五〇〇円)
書かれたらそれまでよ日誌
講談社「Views」一九九七年一月号の間違った記事に対する空しい抗議の記録
(青幻舎 二、〇〇〇円)

正田桂一郎
イタリアワインの職人たち
(JTB 一、七〇〇円)
朽見 行雄
21世紀への平和と創造
(溪水社 一、二〇〇円)

鳴矢 志郎
え、新全国紙創刊への布石を打った話に終始した。
もし実現した場合は、経済ニュースでの優劣が勝敗の分かれ目になり、読者対象層が高収入・高学歴で重なるため、広告の取り合いが激化するだろうと、予測した。
コンラッド氏は大手新聞グループ「サザム」社の最高責任者で、英国の「デイリー・テレグラフ」も所有。あのマードック氏の「タイムズ」と

寄贈書

秦正流 兵戈無用
若きジャーナリストへの遺言
朝日新聞社

招待券

朝日新聞社から「三岸節子展」(9/20)「星野道夫の世界展」(9/28)「手塚雄二展」(9/29)「封印された南宋陶磁展」(10/4)「ウジェーヌ・アジェ回顧展」(11/4)「アフリカ アフリカ展」(11/24)、産経新聞社から「フランスコミックの世界展」(9/13)「フランスファッション・キルト展」(9/14)をそれぞれご惠贈いただきました。お礼申しあげます。

の低価格競争を耐えしのいた強者。「G&M」紙が警戒するのも無理はない。

その後に発行されたE&P誌(七月二十五日付)によれば、サザム社がすでに新たな新聞名として「ナショナル・ポスト」を商標登録し、十月の創刊に向け準備に入っているとのこと。(石川)

レストラン・ラウンジのご案内

和食は9階のレストラン、洋食は10階「アラスカ」を利用していただきます。午後2時のラストオーダー以後はラウンジ（9階）で軽食がとれます。

お願い

◆**テーブル予約を** できるだけ事前にテーブル予約をお願いします。予約の電話番号は下記のようになっています。10階のアラスカの電話が混雑しているときは、9階受付で洋食の予約も可能です。その際にはお名前、社名、会員番号をお願いします。

◆**会員証をテーブルに** 9階の和食レストラン、10階「アラスカ」の会員席とも、テーブルの上のカード立てに会員証を立ててください。ただし、メンバーズテーブルではその必要はありません。

ご不明な点やご意見がございましたら、なんでもフロアマネージャーにお申し出ください。

喫茶・バー 9階ラウンジ

午前10時～午後10時
(ラストオーダー8時30分)

昼のレストランのオーダーストップ以後は午後5時までカレー、ピラフなどの軽食をサービスします。午後5時以降はお酒のつまみ料理を充実させましたので、お試してください。

土曜日は午後6時で閉めさせていただきます。

和食 9階レストラン

昼 午前11時30分～2時30分
(ラストオーダー2時)

夜 午後5時～9時
(ラストオーダー8時30分)

* 予約電話 3503-2721

土曜日は、10階「アラスカ」はお休みですので、9階で和食と洋食を用意します。土曜日の夜は休業します。

洋食 10階レストラン「アラスカ」

昼 午前11時30分～2時30分
(ラストオーダー2時)

夜 午後5時～10時
(ラストオーダー9時)

* 予約電話 3503-2731

* 土曜、日曜は休業

会員席へどうぞ。手ごろな価格の「会員用メニュー」を用意しています。お客さまをされるときには一般席のご利用を。2割引が適用されます。

二つのレストランQ&A

Q 九階の食堂はどう変わったの

和食専用になりました。これまで三品だったメニューが五品になりました。

Q 気楽に洋食を食べたいのだが

十階のレストラン「アラスカ」内に「会員席」を設けました。これまでと同価格の「会員用メニュー」を用意しました。コースメニューのほか、単品の魚・肉料理も召しあがることができます。

Q 大事なお客と食事をするときは

洋食なら十階レストラン「アラスカ」の、眺めの良い窓側の「一般席」がお勧めです。高級レストランの豪華メニューが二割引になります。会員はもちろん、同伴の方を含めてです。

Q 家族や友人と落ち着いて食事をしたい

和食レストラン（九階）の夜には懐石コースがあります。季節の食材をいかした料理をお楽しみください。五千円と七千円の二コースがあります。七千円のものにつ

いては事前にご予約ください。

Q テーブル予約は必ず必要なの

お一人でメンバーズテーブルを使うときは、もちろん予約は不要。そうでない場合は、時間帯によっては待つこともありますので、予約をお勧めします。

Q どこに予約すればいいの

和食は三五〇三―二七二一
洋食は三五〇三―二七三一へ。
洋食の際は、「会員席」か「一般席」のどちらを利用されるかもお知らせください。

Q 同期会を開きたいのだが

十五～三十人程度の利用に適した個室が、九階と十階に合わせて四室あります。パーティー用のメニューがありますので、三五〇三―二七二一へお問い合わせください。
Q 知り合いが披露宴会場を探しているのだけれど

週末、十階レストラン「アラスカ」は一般向けの貸し切りを行っています。クラブ会員の紹介があれば、割安で利用できますので、三五〇二―七〇六四（アラスカブライダル部）へ。

写真部

写真 塩入 正夫

(一九八九年毎日新聞入社 横浜支局
などを経て 現在 東京写真部)



砲台跡が並ぶ東京湾「第二海堡」(8・7)

砲台島の運命は

東京湾の玄関口、浦賀水道の真ん中に人工島の「第二海堡」がある。帝都東京を守るため、一隻の敵艦も東京湾に入れないという帝国海軍の砲台だった。戦後アメリカ占領軍にこわされ、隣にあった第三海堡は水没してしまった。

釣りの好きな息子にこの写真を見せると、「ここはいい穴場に違いない。魚がうようよいるよ。一度舟をやとっていってみよう」という。東京湾はいい釣り場で、土、日曜は釣り人がいっぱい集まるという。

現在、海上保安庁が管理しているこの島を民間に開放して、ここに釣り人センターを設ければ、うんと人集めができるだろう。

しかし、かつてエネルギー問題を取材した私としては、この島は取り扱った方がいいのではないかと思ってしまう。東京湾沿岸は世界一のエネルギー集積基地で、ここへ世界各地から石油タンカー、LNG(液化天然ガス)専用船らがピストン輸送で発着する。海堡のある狭い水域で接触事故を起こしたら大変と心配するわけだ。

さて、どうすればよいのか。

(大谷 健)

「取材証」でレストランをご利用ください

ことしは三年に一度の「日本記者クラブ取材証」の更新期となっています。すでに各社から取り扱った担当者の登録をいただき、新しい取材証（うす紫色）をお送りしました。

これまで取材証は、国公賓などの要人会見を取材する非会員記者用のIDカードとして使用を限定してきましたが、今回からこの取材証を携行すれば、会員同様にクラブのレストランやバー、ラウンジを利用できることになりました（第305回理事會決定）。

各社の社員や霞が関近辺の主要出先クラブの

方々などが、ニュースソースとの会食や同僚との打ち合わせをする際などに有効にご利用いただきたいと思えます。地方紙・地方局は東京支社で管理していただいておりますので、ご利用ください。

リニューアルを祝って特別ディナーメニュー

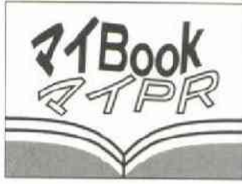
九月中は、通常八千五百円のフルコースディナー（虹マスのマリネ エスカルゴのパートフィロ包み 的鯛のヴァンプランソース ファイレスデーキ赤ワイン入りバターソース添え サラダ デザート コーヒー グラスワイン）が、四千四百円（税・サービス込み）になっています。リニューアルした10階「アラスカ」で、夜景を楽しみながら

「大転換 瓦解へのシナリオ」

岸井成格（毎日新聞論説委員長）

一九九八年、日本は間違いなく歴史的なターニングポイントに立っている。維新、敗戦に次ぐ「第三の革命期」と呼ばれるような大きな変革の前身や背景は何なのか、自分なりの座標軸を示してみた。それは同時に「日本病」の診断にもなると考え、とくに変化に機敏に対応できない日本の政治がかかえる構造的な「病」にスポットを当ててみた。やや無謀な試みだったが、多々、ご批判をいただければ幸いだ。

（毎日新聞社 一、五〇〇円）



「死刑の大国アメリカ」

宮本倫好（個人D会員 産経新聞OB）

文明国では日本と米国だけが死刑制度を存置している。終始「密行主義」で処刑してしまう日本に比べ、米国の公開制度は徹底している。特に処刑の現場にまで立ち会うことが普通のジャーナリズムの姿勢は、日本と対極にある。すべてを国民の前に明らかにするという使命感と、市民の命を奪う権限を持つ行政を、市民に代わって監視するという観点からだ。犯罪数も死刑囚の数もケタ違いの米国だが、死刑制度は日本のメディアがその根源に迫れないテーマのひとつであると思う。

（亜紀書房 一、七〇〇円）

特別メニューをお試しください。

「予約電話（アラスカ直通）三五〇三―二七三―ファクス三五〇三―二七三―」

計報 足立和之会員（日本経済新聞社、53歳）が

八月五日、外山四郎会員（オール・エフ・ラジオ日本、67歳）が同十九日、平嶋周次郎会員（宮崎日日新聞社、65歳）が同三十日死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員 八一人 個人会員 一、八四九人 法人・個人賛助会員 五六社 一八二人 特別賛助会員 五二人 名誉・功勞会員 一五人

計 二〇五社 二、九一四人

九月の行事（7日現在）

11日（金）正午～午後2時 不破哲三共産党
委員長昼食会
16日（水）正午～午後2時 金東圭韓国大使
昼食会

会報委員会

委員長 住田良能
委員 久保伸太郎 秋山民雄 伊波新之助
梶邑義道 和田千年 平野恭子
連絡 長谷川和子 本庄五月
（電話）〇三―三五〇三―二七二二
（FAX）〇三―三五〇三―二七二二